



会越国境 御神楽岳～貉ヶ森山～中ノ又山～魚止山

佐貫

【日時】 2012年4月28日(土)～5月3日(木)

【メンバー】 L佐貫、棚橋

4/28 快晴

かやぶきの里の駐車場に駐車し、常浪川にかかる橋を渡りセト沢林道奥の室谷口登山道取付に向かって歩き出す。路面は残雪に覆われており、数か所は側壁から落ちた雪でふさがれていた。最近このルートから御神楽岳に登った人もいないのか、足跡は見当たらない。

朝から天気は絶好調で気温はうなぎ昇り、20kgを超える荷物も手伝って身体がしばし休憩を要求する。幸いそここに水が流れており、悪場峠から五剣谷への尾根と違ってしつこいアップダウンがあるわけでもないの、初日の登りルートとしてはかなり助かる部類に入るはずなのだが。

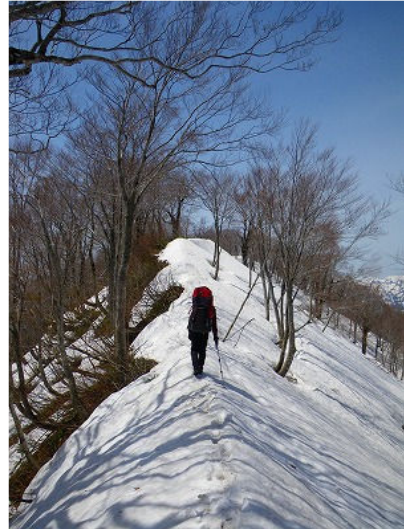
大森山に着くと御神楽山頂もあと少しという感じで、やや気分が楽になった。真っ青な空の下、広い雪尾根をのんびり歩いているといつの間にか雨乞峰へと導かれ、そこから一旦下って登り返すと雪がついていない御神楽岳山頂に立っていた。本山行中、一番メジャーで標高も高いこの山がゴールではなくスタートなのはちょっと変な気もするけれど、とりあえずこれから進む県境稜線が全て見通せて眺望は最高だ。本名御神楽岳まで所々露出した夏道を辿り、2つ目の山頂から見下ろすと、御神楽岳管理舎(本名御神楽の小屋)の周辺が予想通り幕営適地であるのが確認できた。小屋に近づいてみると、入口は出ており羽目板を外して入ることが可能である。これ幸いと利用させてもらい、初日の夜を快適に過ごすことが出来た。(佐貫記)

4/29 快晴

快適な小屋のおかげで、体調はすこぶる良い。小屋を出て昨日進んできた方向に目を向けると、本名御神楽岳と御神楽岳が間近に見える。御神楽岳は、会越で一番好きな山だ。先ずは水晶尾根に思いを馳せながら出発する。それにしても、今日もザックが重い。昨日は頑張って酒をノルマ通り、持ってきた量の半分を片付けたがそんなのは雀の涙だったようだ。そして歩き始めて間もなく、藪漕ぎに突入する。まだ体もあまり山に馴染んでいないので、じっくり進む。5年前の5月下旬に前ヶ岳南壁のV字スラブを登りに来たが、その時はCo1145から小屋までの僅かな距離だったので、「ごく薄い踏跡をコシアブラなど探しながら進んでみると、大した苦労もなく登山道に出た」位の印象でしかなかった。しかし今回は距離だけでもその約4倍、更にCo1145から先は立ち入るのは動物位といった様相だ。「密藪を如何に通過するか」色々創意工夫していると、再び雪の上

に出られるまでの2時間は、実にあっという間だった。速度もそこそこ出ていたと思う。振り返ると前ヶ岳南壁スラブが、気持ち良く広がっていた。

休む間も無く、次なる目的地である日尊ノ倉山を目指す。しばらくは雪が続いており、快適に進む。日尊ノ倉山の山頂に立つと早々に、懐かしい峰越林道の峠を目掛けて下降する。下りた所には小さな石の祠の上の部分と、林道を示す標識が雪から顔を出し掛けていた。その標識には「本名まで18.5km 室谷まで22km」とある。それを改めて眼にすると、こんな所を突っ切る林道が愛おしくなり、「道が崩れようと橋が流されようとずっと在り続けて貰いたい」と思わずにはいられなかった。



右は新潟、左は福島

そこより、一年ぶりの来訪となる猪ヶ森山に登り返す。そして着いた先は以前と変わらぬ、たおやかな山頂だった。この付近より続く県境尾根は、ブナの大木が点在する本当に美しい所だ。正に桃源郷と呼ぶに相応しい。佐貫は「新潟・福島県境の中でも指折りの素晴らしさ」だと、ひとり悦に入っている。その後、少し前に行く佐貫が雲河曾根山手前の鞍部に差し掛かった時、「人がいる！」と声を上げている。近づいてみて二度びっくり、その「人」とは何と先日交流山行で御一緒させて頂いた会津山岳会の若大将こと小沼さんだった。単独行にて、塩沢から猪ヶ森山を往復されるとのこと。以前の我々のルートと同じだ。予期せぬ再会に休憩を兼ねて再度、交流タイム。現燈山や高盛東山の話や我々の予定ルートの話で盛り上がる。小沼さんがすごいのは、我々の予定ルートの概要を伝えるとすぐさま「今日の泊まりは、東岐山付近ですね」とか、地図も見ずに返されることだ。きっと会津の山々のことなら、隅々まで頭に入っているのだろう。

そんな楽しい一時を終え、改めて東岐山を目指す。出だしは快調であったが、尾根が狭まる登り返し部からは藪漕ぎを強いられる。それでも何とか頑張って15時前に、雪に覆われた東岐山手前鞍部の幕営適地に着いた。(棚橋記)

4/30 曇りのち快晴

昨日から分かっていた通り、朝一から藪を漕いで東岐山に向かう。そして本日の目標である中ノ又山までの稜線をしげしげと眺めてみると、やっぱり黒い。一体何時間かかるのか不安になるが、とにかく前に進むしかないので休憩もそこそこに再び歩き出す。東岐山から小金井山の間はどういうわけか鈍目があり、以前はこの尾根を人が何らかの理由で通ったことが伺える。そういえば以前、室谷川東岐沢を遡行した時にも、ぜんまい小屋らしき跡地と什器の残骸があったっけ。

たまに雪がつながっていたり天気が高曇りだったりして、調子良く進む局面もあったが、そこはこの標高が低く細い尾根、ずっとスムーズに距離を稼げるわけがないのだった。中ノ又山まで距離にして1/3進んだ時点で既に4時間経過、つまり12時間行動しないと今日の目的地には着かないということになる。そんな計算をして脱力しかけていると、



稜線上には雪がない

折悪しくも曇り空が次第に晴れ上がり気温が上がってくるのが感じられ、当然目の前にはまだまだ藪が続いているのだった。（しかし県境稜線の名誉(?)のために記しておく、全体的には藪がそれほどひどいわけではなく、随所にケモノ道や薄い箇所があるのも事実である。藪のグレードとしては2級上程度というのが適当だろう。）

かなり弱った人の心電図の波形のように、何度か緩く南北にカーブしながら県境稜線は続く。1年に30人も見る人は居ないであろう小金花山の三角点を確認し、次に尾根が北向きにカーブするところで、どうやら今日中に中ノ又山へ達するのは無理だということが明らかになった。そしてそれまでの間に適当な幕場が何か所あるかということ、確実にOKといえる場所は見える範囲にはない。藪の上やかろうじて灌木に引っかかっているブロックの上で幕営というのは避けたく、結局予定の行程の1/3近くを残してこの日は行動を終了した。幕場から中ノ又山の背中に沈んでいく夕日がとても綺麗だった。（佐貫記）

5/1 快晴

いよいよ山行4日目。私の知っているエキスパート山屋さんは、「山は5日目から(が良い)」と言っておられるが、私は雪山、沢を問わず4日目からが俄然楽しくなってくる。そして今日からはサマータイム制を導入(5月に入ったからという訳ではない)し、起床時間を30分早めて2時起き4時出発とする。

思惑通り、雪も落ち着いているし、藪に突入しても涼しいので大分消耗が抑えられる。暑くなる前に少しでも進んでおこうと更に先行していた佐貫だったが、タオルで顔を押さえて立ち止まっている。藪で右頬をやや深く切ったらしく、白いタオルは出血で赤く染まっている。不安を煽っても仕方がないので、ウエストバッグに入れていた絆創膏を取り出して受傷部に貼り、早々に出発した。一昨日の「丹下右膳」状態といい、佐貫の奮闘振りには頭が下がる。

中ノ又山手前のCo942mピークの更に少し手前が、遠目にも露岩しているのが見えており、どのように越えようか考えながらここまで来た。藪を拾えば何とか行けそうだが、念の為にスワミベルトを着けておくことにする。そして足を置く位置に、細心の注意を

払いながら登り始める。プロテクションが取れるような支点が無かったので、結局ロープは使用しなかった。

更にもう一登りで中ノ又山の山頂へと着く。今回も三角点が見つかり大満足。いよいよ裏ノ山を目指して方向を変える。するとこの快適な雪の上に比較的新しい、人間のトレースが付けられている。おそらく毛無山を目指しているのだろう。どこのパーティなのだろうか？追いつけるだろうか？自然とスピードも上がり気味となる。またもや藪に突入という地点に、ストックが一組デポされていた。トレースも単独を思わせる感じだった。しかし残念ながら、毛無山の分岐までに追いつくことは叶わず確認できなかった。恐らくお会いする機会は得られないだろうが、相当な「下田マニア」ではないのだろうか？など、興味は尽きない。

そして我々はトレースの主とは別方向のCo915mへと到着。ここからの下りは急な上に尾根形状も成しておらず、どうしたものかと入念に偵察を行ない、進むべきルートを検討する。結局、上部に不安定な巨大ブロックを持つ右岸側の雪渓から少し離れた急な斜面を、藪を掴みながら下る。万が一巨大ブロックが崩壊しても大丈夫なように、走路を避けながらの下降だが、下り進むと左岸側の雪渓上部にも巨大ブロックが有るのではないかと。下降しているこの斜面も大分スラブが目立つようになってきたので、細心のルーフアイを強いられる。そして下り始めてから45分ほど要して漸くデブリで埋まる沢型へと下り立つ。すかさず尾根上の安全地帯へと移動し、やっと激しい緊張状態より開放された。そしてザックを下ろして小休止する。計画より一日近く遅れている上、まだ14時前ではあるが休息も兼ねて、ここに泊まることにする。本当に良い天気なのでパンツ一丁になり、汗で湿った衣類等を一気に乾かした。(棚橋記)



下降してきた斜面（写真では緩傾斜に見えるが…）

5/2 曇り一時晴れ

今日も勤勉にヘッドンつけて藪の中へ突入だ。10分もすれば灯りは不要となり、振り返ると昨日下った915mピークからの灌木帯とデブリが恐ろしく急な斜面となって聳え立っている。涼しい早朝は標高差200mの裏ノ山への登りも大して苦にはならず、右手に名無沢支流から尾根に立ち上がってくる迫力のスラブを鑑賞するゆとりすら持ちながらの藪漕ぎだ。低灌木主体のモヒカン尾根をわざわざ進むこと1時間半で裏ノ山の三角点にたどり着く。2008年9月以来の再訪、我ながらよくやるよと思ってしまう。

駒形山へはもう大きな登りはなく、かといって尾根も広くはならないのであまり雪は拾えない。1096mの駒形山北峰直下は、それまでの葉のない低灌木に代わってシャクナ

ゲやら名前のわからない常緑樹やらが四方八方で千手観音のように繁茂する密藪地帯となっていた。20分近い格闘の後、やっと尾根の方角が変わるのを確認し、同時にこれからは大分雪の上を歩けそうなことも判明して一息つく。150mほど標高を下げると、それまでは無かった切り付けも見られるようになった。

翌日は天気は崩れる予報なのは認識していたが、三川分水峰に登り返すあたりで空が



駒形山まで、藪とスラブの光景

急に暗くなり、雲の流れも速くなったのに気付く。怪しげな空に、ラジオを出して天気予報を確認すると、下越は晩から雨、会津は夕方から雨と冴えない見通しを伝えている。そして魚止山までの尾根の黒っぽさを見ると、またまた時間のかかる藪漕ぎに雨が降り出しそうな今から突っ込んでいくかどうか非常に迷うとこ

ろだ。全身びしょ濡れになってから幕場を探して整地して設営していたら悲惨な泊まりになるだろう。そもそも今日は天気もつなら多少残業しても下りられるところまで下りたいという心積もりだったので散々逡巡したが、結局は「明日は降られるだろうが、今日は濡れる前にテントに入ろう」ということになった。ゴウゴウ鳴る風をうまく避けられる静かな場所を見つけ、テントに入ってくつろいでいても雨が降り出さず、失敗したなど悔しく思いながら、残り少ない酒やつまみをきれいに消費した。（佐貫記）

5/3 曇りのち雨

結局、朝まで雨は降らなかった。しかし天気予報では必ず、しかもまとまって降ることを告げているので雨具を着てテントから出る。曇っていて暑くないのはラッキーだ。最終日のスタートは、いきなりの急登で始まるが、これまた曇っているためかアイゼンの必要性は感じなかったので、ピッケルのみ手にして出発する。

三川分水峰まで約10分、ここで早々に中間着を脱ぐ。ここより我々は魚止山に方向に進路を取ったが、確りとした踏跡が続いており驚かされる。道が出来たのかと思ったと言っても、決して大袈裟ではない。恐らく反対側も矢筈岳まで、同じように続いているのだろう。「さすがマイナー名山のひとつだけのことはある」と妙に感心してしまった。時折風が強まることがあったが、これがまた心地良かった。

魚止山の手前で、この6日間で2人目の人間と会う。やはり矢筈を目指しているとのこと。魚止山から室谷への様子を尋ねたところ、赤布が結構付けられているとのことだった。あと数分早く進んでいれば魚止山の山頂記念写真を撮って貰えるところであったが、残念ながら今回も怪しいセルフタイマーでの撮影となった。しかし今回は良い方法が思いつき、結構上手く撮ることができた。



ここから先は先ほど仕入れた情報通り、赤布がそれなりに付けられており、迷うことはない。6日前に室谷を出発した時は何で気がつかなかったのだろうと思う位、新緑が目付いた。よく考えてみると、室谷川を周遊していた6日間で季節が進んだのだ。これにも感動してしまった。

ここまでは雨天時の装備チェックが出来て丁度良かったなどと、都合良く考えていたが、いよいよ雨脚が強くなってきた。しかし林道まではあと少し。この踏跡の起点の位置も、魚止山で情報収集した通りであった。早く美味しいものが食べたい一心で、殆ど休憩も取らずに倉谷林道を急ぐ。倉谷林道は今年の豪雨の影響のためか、林道だか沢だか判らない位荒れている箇所が散見された。そんな中、時折本降りの雨に打たれながら1時間半ほど歩いて、マイカーの待つ室谷集落へと帰り着いた。(棚橋)

【感想】

「越後山脈」なる素敵な呼称がある。その範囲に定説は無いようだが、私の好きな山や馴染みの深い山々が中心となって構成されている。そのため私は「越後山脈」の様々な山を、色々なルートから、ジャンルを問わず登ってきたことになる。しかし「本名御神楽岳～貉ヶ森山～東岐山～小金井山～小金花山～中ノ又山」の間の稜線は、その困難さから部分的には訪れているものの、大半は手が付けられないでいた。(以前、厳冬期に縦走する計画を立案したことがあったが、天候不順のため断念せざるを得なかったことがある。)

「どうせなら矢筈まで足を延ばせば良かったのに」と思う人もいるかも知れないが、このように山行のハイライトは前半部分であった(裏ノ山、毛無山、駒形山、矢筈岳等は既に訪れたことがあったし)ので、それだけでも大満足である。

それから今回の日程は、一回の山行としては今までで最長であったが、食事はもちろんのこと、酒もつまみも昼間の嗜好品も最終日まで量・質共十分有り、いつもの山行とあまり変わりはない。(前半はザックが重かったが、切り詰めた感覚は無かった。)このような山域を6日間も歩けたこと、しかも天候にまでも恵まれことは感謝に堪えない。敬愛する笠原藤七氏でさえも「小金井山～小金花山」辺りは登っていないのではないかと勝手に思い込み、一人ほくそ笑んでいる。(棚橋)

室谷川に興味を持ち始めてから、いつか縦走してみたいと思っていた源流を取り巻く尾根。たおやかな雪尾根あり、細い藪尾根あり、灌木頼みのスラブ下降ありと変化に富んだ山旅を満喫できた。多くの会員には見向きもされないような山行をまたもや重ねてしまったが、数年来の念願が叶って本人としては大変嬉しく思っている。懐かしい尾根や沢を常に眼下に、それらをトレースした時のことを思い出しつつ歩くのは実に楽しく、顔から流血しながらの藪漕ぎですら本当に辛いとは感じない6日間だった。

室谷川周辺は客観的に見ればクラシックでもメジャーでもハードでもない地味な山域なのに、随所にハッとさせられるような景色が隠れている。そんな「宝物探し」が楽



しくて何故か通ってしまい、沢や尾根にチマチマと赤線を引いて行くというちょっと暗い趣味にハマって行くのだ。ここに巡り合わせてくれた山の神様と折々に付き合ってくれた仲間達に心から感謝している。(佐貫)

【行程】

4/28 室谷集落(7:45)～セト沢林道入口(8:03)～登山口(9:03)～大森山(12:15)～雨乞峰(13:36)～御神楽岳(14:07/13)～本名御神楽岳(14:49)～避難小屋C1(15:05)

4/29 C1(4:34)～前ヶ岳(6:23)～日尊の倉山(9:23)～峰越林道(10:12)～貉ヶ森山(11:15/19)～Co1239m付近(11:38/55)～雲河曾根山分岐(12:04)～東岐山手前鞍部付近C2(14:50)

4/30 C2(4:40)～東岐山(5:09/18)～小金井山(6:50/54)～小金花山(11:21/26)～標高点897m付近C3(14:15)

5/1 C3(3:54)～中ノ又山手前Co942m付近(7:01/8:01)～中ノ又山(9:08/13)～名無沢源頭付近C4(13:46)

5/2 C4(4:19)～裏ノ山(6:38)～駒形山北峰(10:22/25)～三川分水峰手前C5(13:20)

5/3 C5(4:22)～三川分水峰(4:32)～魚止山(7:02/19)～倉谷林道(9:03)～室谷集落(10:40)

【地図】御神楽岳、貉ヶ森山、駒形山、室谷

概念図

